語学教育研究論叢第23号

現代モンゴル語文法の語学教育学的一考察
―― 付属語接尾法を中心として ――

吉野　耕造

A Language Educational Study of the Grammar of the Modern Mongolian Language

YOSHINO Kozo

Summary

The purpose of this paper is to describe the grammar of the modern Mongolian language from the educational viewpoint of linguistics. One of the points pursued in this paper is the description of how to classify the cases and suffixes of the Mongolian language based on the principle of vocalic harmony. The paper also presents the classified names of the cases and suffixes.

Ⅰ．はじめに

本稿では、現代モンゴル語[1]文法を語学教育の観点から記述することを目的とする。特に、そのなかで、付属語接尾法[2]を中心に論述する。

モンゴル語は膠着語であり語順が日本語に酷似しているため、日本語母語話者にとって「学習しやすい言語」とされてきた。たしかに、統語面の学習において日本語母語話者の理解は速やかなものがある。しかし、形態（自立語、付属語、接尾法）面の学習では、モンゴル語がしばしば指摘されるほどに「学習しやすい」といえるかどうか疑問でもある。なぜなら、付属語接尾法が母音

調和の原則に基づくため、形態面の学習には母音調和の理解が不可欠だからである。だからといって、モンゴル語学習において、母音調和のみを個別に暗記することは効率的とはいえず、その後の学習意欲にも影響しかねない。むしろ、語学教育の観点から重要なことは、付属語接尾法理解のために、母音調和を学習者にいかに導入、提示するかという視点である。

本稿では、こうした付属語接尾法の重要性に鑑み、モンゴル語の母音および単語を母音調和の原則（性別・系列別）に基づき区分することで、モンゴル語の母音調和を付属語接尾法の視点から再構成した。その上で、付属語接尾法が、母音調和の原則（性別・系列別）および語幹末音の種類に基づいていることを明確化した。そして、これまでどちらかというと、付属語（語尾、接尾辞、助辞）が、個別に記述される傾向にあったが、本稿では、各付属語に統一化された区分名称を付与して、付属語学習の全体的理解をめざした。

Ⅱ．母音調和の原則

母音調和の原則とは、周知のとおり、単語を構成する母音にかかわる制限のことで、一般に母音が調音上の特徴によって幾つかのグループに分類され、一つの単語が同じグループの母音のみによって構成される現象をさす。この母音に関わる制限は、同一語内は勿論、その自立語に接尾される付属語（語尾、接尾辞、助辞）にも同じように適用されるため、自立語、付属語が同じグループの母音によって構成される。この母音調和の原則は、アルタイ諸語（ツングース諸語、モンゴル諸語、テュルク諸語等）およびフィン・ウゴル諸語（ハンガリー語、フィンランド語等）などに共通してみられる現象であるが、モンゴル語の母音調和の方式は、母音調和の主原則（性別）および母音調和の副原則（系列別）に区分される。

1.　母音調和の主原則

母音調和の主原則は、母音の性別区分およびその母音配列に基づく。

1．1．母音の性

モンゴル語の母音は３つのグループ（男性母音、女性母音、中性母音）に分類される。母音は、「舌の調和」に基づき、一般に、男性母音（後舌）、女性母音（前舌）および中性母音（前舌）に区分される。

表１：母音の性

母音の性		母音の種類	調音特徴
男性母音		а，я，у，о，ё	後舌母音
		ы＊	前舌母音
女性母音		ө，э，е，ү，	前舌母音
中性母音	１種	и，й	前舌母音
	２種	ю	前舌母音、後舌母音

メモ１　＊男性母音ыのみ前舌母音となる。

1．2．母音の性別配列

モンゴル語の男性母音および女性母音は、その性別に基づいて以下のように配列される。

（1）男性母音が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降にも男性母音があらわれる。

（2）女性母音が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降にも女性母音があらわれる。

つまり、一般的に、男性母音と女性母音は同一語内において共存することがない。これは母音調和の主原則における最重要事項である。

上記（1）、（2）を前提としつつも、中性母音は、同一語内において男性母音、女性母音と共存しえるため、下記（3）、（4）が付記される。

（3）男性母音が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降には、男性母音または中性母音１種があらわれる。

（4）女性母音が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降には、女性母音または中性母音１種があらわれる。

さらに、中性母音が第 1 音節にあらわれた場合には、以下のような母音配

列となるため、下記（5）、（6）が付記される。

（5）中性母音１種が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降には、女性母音、中性母音１種があらわれる。

（6）中性母音２種が同一語内の第１音節にあらわれた場合、第２音節以降には、男性母音、女性母音、中性母音１種があらわれる。

表２：母音の性別配列

同一語内の母音の性別配列	
第１音節の母音	第２音節以降の母音
男性母音	男性母音、中性母音１種
女性母音	女性母音、中性母音１種
中性母音１種	女性母音、中性母音１種
中性母音２種	男性母音、女性母音、中性母音１種

１．３．単語の性

前項「１．２．母音の性別配列」に基づき、モンゴル語の単語は、男性語、女性語に分類される。なお、モンゴル語には中性語という範疇が存在しないため、以下の点に注意を要する。

（1）中性母音の含まれる単語の性別は、その単語内の男性母音、女性母音に基づき、男性語、女性語のいずれかとなる。

（2）中性母音１種のみから構成される単語は女性語となる。

（3）中性母音２種のみから構成される単語は、各単語ごとに性別が異なる。

表３：単語の性

単語の性		同一語内の母音の性別配列	
		第１音節の母音	第２音節以降の母音
男性語	男性語１	男性母音	男性母音、中性母音１種
	男性語２	中性母音２種	男性母音
女性語	女性語１	女性母音	女性母音、中性母音１種
	女性語２	中性母音１種	女性母音、中性母音１種
	女性語３	中性母音２種	女性母音、中性母音１種

2．母音調和の副原則

母音調和の副原則は、母音の系列区分およびその母音配列に基づく。

2．1．母音の系列

モンゴル語の母音の性別は系列に細分化される。モンゴル語の4基礎母音（a，o，ɵ，ɘ）は、（1）調音（「舌の調和」および「唇の調和」）、（2）母音配列、（3）文字表記、において以下の特徴をもち、同一語内で4基礎母音は明確な系列をなす。そのため、モンゴル語の母音は、その性別が細分化され、4系列（a，o，ɵ，ɘ 系列）に再区分される。

（1）調音

4基礎母音は、舌、唇の調和に関して、a（後舌、非円唇）、o（後舌、円唇）、ɵ（前舌、円唇）、ɘ（前舌、非円唇）という相互に明瞭な基準特徴をもつ。

（2）母音配列

上記（1）の基準特徴に基づき、4基礎母音は、一般に同一語内に共存しない。

（3）文字表記

4基礎母音は、短母音として、同一語内の各音節に繰り返しあらわれる。

なお、4基礎母音を第1種系列母音とし、それ以外の9母音を第2種系列母音とする。また、一部の第2種系列母音には、複数の系列に属するものがある。

表４：母音の系列

母音の性	母音の系列	第１種系列母音	第２種系列母音
男性母音	a 系列母音	a	я , у, ы , и , й , ю
	o 系列母音	o	ё , у, ы , и , й
女性母音	ө系列母音	ө	е, ү, и , й
	э 系列母音	э	ү, и , й , ю

２．２．単語の系列

母音の系列に基づき、モンゴル語の単語は、4 系列語に分類される。つまり、a 系列母音をもつ単語を a 系列語、o 系列母音をもつ単語を o 系列語、ө 系列母音をもつ単語を ө 系列語、э 系列母音をもつ単語を э 系列語とする。

表５：単語の系列

単語の性		単語の系列
男性語	男性語 1	a 系列語
		o 系列語
	男性語 2	a 系列語
女性語	女性語 1	ө 系列語
		э 系列語
	女性語 2	
	女性語 3	

Ⅲ. 単語・品詞分類

単語は自立語、付属語に分類される。自立語は実詞、動詞に区分され、付属語は、語尾、接尾辞、助辞に区分される。まは、自立語に付属語が接尾され、それぞれ文の成分となる。

表6：単語・品詞分類

単語分類	品詞分類	
自立語	実詞	名詞
		代名詞
		形容詞
		副詞
		数詞
	動詞	
付属語	語尾	格語尾
		動詞語尾
		所有語尾
	接尾辞	
	助辞	

1．自立語

1．1．自立語の機能

自立語は、文の成分（主語、述語、補語）となる。

1．2．自立語語幹

付属語のうち、格語尾、所有語尾、接尾辞（名詞形成接尾辞）は、実詞語幹に接尾され、動詞語尾、接尾辞（動詞形成接尾辞）は、動詞語幹に接尾される[3)]。

（1）実詞語幹

実詞語幹は概ね主格に一致するが、一部の実詞では語幹が不安定で、格語

尾を接尾する場合、語幹末に子音нまたはгがあらわれるものがある。

①隠れたнをもつ実詞

属格、与位格、奪格を接尾する場合、語幹末に子音нがあらわれる。

②隠れたгをもつ実詞

属格、奪格、造格を接尾する場合、語幹末に子音гがあらわれる。

（2）動詞語幹

動詞語幹は、辞書掲載形（形動詞形-х 形）より再構成される。形動詞形-х 形を語幹部と語尾に区分し、正字法[4]に基づき、その語幹部に、母音挿入・削除、記号接尾をすることで動詞語幹が決定される。また、動詞語幹の種類に基づいて、動詞が「群・式・型」にそれぞれ区分される。

表７：動詞語幹に基づく動詞分類

動詞分類名称			用例			動詞語幹区分名称
群	式	型	形動詞形-х形	形動詞形-х形語幹部	動詞語幹	
第１群	１式	１型	авах（買う）	ав-	ав-	子音末語幹
	２式	１型	эхлэх（始まる）	эхл-	эхэл-	短母音前置語幹
		２型	бүжиглэх（踊る）	бүжигл-	бүжиглэ-	短母音後置語幹
第２群	１式	１型	асуух（質問する）	асуу-	асуу-	長母音末語幹
			байх（ある・いる）	бай-	бай-	二重母音末語幹
第３群	１式	１型	наргих（楽しむ）	нарги-	нарги-	短母音и末語幹
	２式	１型	болих（止める）	боли-	боль-	軟音符末語幹
		２型	очих（行く）	очи-	оч-	и削除子音末語幹

２．付属語

２．１．付属語の機能

付属語は、自立語（語幹）に接尾・後置され、自立語相互の関係を示す。

２．２．付属語区分

付属語は、母音調和の原則（性別、系列別）に基づく接尾・後置法（母音交替方式）の相違により、それぞれ区分される。

表８：付属語区分名称

<table>
<tr><th colspan="2">付属語区分名称</th></tr>
<tr><td rowspan="2">第１式付属語</td><td>第１式１型付属語</td></tr>
<tr><td>第１式２型付属語</td></tr>
<tr><td colspan="2">第２式付属語</td></tr>
<tr><td colspan="2">第３式付属語</td></tr>
<tr><td colspan="2">第４式付属語</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第５式付属語</td><td>第５式１型付属語</td></tr>
<tr><td>第５式２型付属語</td></tr>
<tr><td colspan="2">第６式付属語</td></tr>
</table>

（１）第１式１型付属語

母音をもたない付属語のため、母音交替形がない。そのため、自立語（語幹）の性別、系列別にかかわらず、同一の付属語が接尾・後置される。

（２）第１式２型付属語

中性母音 и のみをもつ付属語のため、自立語語幹の性別、系列別にかかわらず同一の付属語が接尾される。

（３）第２式付属語

母音調和の主原則（性別）に基づき、２母音交替形をもつ付属語が自立語（語幹）に接尾・後置される。つまり、自立語（語幹）が、男性語、女性語に２分類され、それに２母音交替形の付属語が接尾・後置される。

（４）第３式付属語

母音調和の原則（性別）、副原則（系列別）に基づき、３母音交替形をもつ付属語が自立語語幹に接尾される。つまり、自立語語幹が、a 系列語，o 系列語、女性語に３分類され、それに３母音交替形の付属語が接尾される。

（5）第４式付属語

母音調和の副原則（系列別）に基づき、４母音交替形をもつ付属語が自立語（語幹）に接尾・後置される。つまり、自立語（語幹）が、a 系列語，o 系列語、θ系列語，ɘ系列語に４分類され、それに４母音交替形の付属語が接尾・後置される。

（6）第５式１型付属語

母音調和の原則に反して、自立語（語幹）の性別・系列別にかかわりなく同一の付属語が接尾・後置される。

（7）第５式２型付属語

自立語から分かち書きされる付属語で、母音調和の原則の制約を受けず、自立語に後置される。

（8）第６式付属語

ゼロ語尾のため、自立語語幹が当該付属語の意味・機能を有する。

２．３．母音交替形数表記

付属語の母音交替形数は、各付属語の男性語（性別分類）または a 系列語（系列分類）の基本形および変型形に母音交替形の数字を添付することにより表記する。なお、第１式付属語、第５式付属語、第６式付属語では、母音交替形がないため、母音交替形数を表記しない。

表９：母音交替形数表記

母音交替形の種類	交替母音の種類	母音交替形数
２母音交替形	y/ʏ	$-y^2$
	ы/и й	$-ы^2$
３母音交替形	a/o/ɘ または я/ё/e	$-a^3, -я^3$
４母音交替形	a/o/ɵ/ɘ	$-a^4$

２．４．付属語分類

本稿で取り上げる、格語尾、動詞語尾、所有語尾、接尾辞、助辞は、付属語区分名称に基づき、以下のように分類される。

表１０：付属語分類

<table>
<tr><th colspan="2">付属語区分名称</th><th>格語尾
区分名称</th><th>動詞語尾
区分名称</th><th>所有語尾
区分名称</th><th>接尾辞
区分名称</th><th>助辞
区分名称</th><th>母音交
替形数</th></tr>
<tr><td rowspan="2">第１式
付属語</td><td>第1式
1型
付属語</td><td>第1式1型
格語尾</td><td>第１式１型
動詞語尾</td><td rowspan="4">－</td><td>第1式1型
接尾辞</td><td>第1式1型
助辞</td><td rowspan="2">無</td></tr>
<tr><td>第1式
2型
付属語</td><td>－</td><td>－</td><td>第1式2型
接尾辞</td><td>－</td></tr>
<tr><td colspan="2">第2式付属語</td><td>第2式
格語尾</td><td>第2式
動詞語尾</td><td>第2式
接尾辞</td><td>第2式
助辞</td><td>2母音
交替形</td></tr>
<tr><td colspan="2">第3式付属語</td><td>第3式
格語尾</td><td>第3式
動詞語尾</td><td>－</td><td>－</td><td>3母音
交替形</td></tr>
<tr><td colspan="2">第4式付属語</td><td>第4式
格語尾</td><td>第4式
動詞語尾</td><td>第４式
所有語尾</td><td>第4式
接尾辞</td><td>第4式
助辞</td><td>4母音
交替形</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第５式
付属語</td><td>第5式
1型
付属語</td><td>－</td><td>第5式1型
動詞語尾</td><td>－</td><td>第5式1型
接尾辞</td><td>第5式1型
助辞</td><td rowspan="3">無</td></tr>
<tr><td>第5式
2型
付属語</td><td>－</td><td>－</td><td>第5式
2型所有
語尾</td><td>－</td><td>第5式2型
助辞</td></tr>
<tr><td colspan="2">第６式付属語</td><td>第６式
格語尾</td><td>第６式
動詞語尾</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
</table>

Ⅳ．接尾法

１．　接尾法の原則

付属語は、自立語（語幹）に、「母音調和の原則」および「自立語（語幹）末音の種類」に基づき接尾・後置される。

１．１．接尾法の主原則

自立語（語幹）は、既述のとおり、「母音調和の原則」（性別、系列別）に基づいて、性別語（男性語、女性語）、系列語（ａ，ｏ，ɵ，ɘ 系列語）に分類され、付属語は、自立語（語幹）の性別、系列別に基づき接尾・後置される。「母音

調和の原則」（性別、系列別）に基づく接尾法の原則を、本稿では接尾法の主原則とする。

１．２．接尾法の副原則

自立語（語幹）は、付属語接尾の観点から、その自立語（語幹）末音の種類によっても区分され、自立語（語幹）末音の種類に基づいて付属語が接尾・後置される。自立語（語幹）末音の種類に基づく接尾法の原則を、本稿では接尾法の副原則とする。なお、この接尾法の副原則にしがたい、これら付属語に関して下記の３点を付記する。

（１）自立語（語幹）末音に対応する付属語形に基づき、付属語は基本形と変型形に区分される。汎用性の最も高い形態を基本形、それ以外を全て変型形とする。

（２）各付属語接尾法の表において、付属語の基本形、変型形を区別し表記する。変型形にはすべて（　　）を付した。

（３）付属語の一部には基本形と変型形がそれぞれ異なる「式・型/区分」に属することがあるため、その都度注記した。

２．付属語接尾法

２．１．格語尾

２．１．１．格語尾の種類

格語尾は、「母音調和の原則」（性別、系列別）の観点から、第１式１型、第２式、第３式、第４式、第６式に区分される。また、意味・用法の観点から、与位格、属格、対格、方向格、共同格、奪格、造格、主格に区分される。

表１１：格語尾の種類

格語尾区分名称	意味・用法	格語尾基本形	母音交替形数
第１式１型 格語尾	与位格：位置、対象、方向、 「～に」「～で」「～へ」	-д	無
第２式格語尾	属格：所有、所属 「～の」	-ы н/-и й н	-ы н [2]
	対格：目的、対象「～を」	-ы г/-и й г	-ы г [2]
	方向格：方向 「～へ」「～方へ」	pyy/pYY	pyy [2]
第３式格語尾	共同格：共同、所持「～いっしょ」「～をもっている」	-т а й/-т о й/-т э й	-т а й [3]
第４式格語尾	奪格：起点、出発点 「～から」「～より」	-аа с/-ооc/-өөc/-э э с	-аа с [4]
	造格：手段、方法 「～よって」「～で」	-аар/-оор/-өөр/-э э р	-аар [4]
第６式格語尾	主格：主語「～は」「～が」	ゼロ語尾	無

２．１．２．格語尾接尾法

格語尾は、「母音調和の原則」（性別、系列別）および「自立語語幹末音の種類」に基づき、実詞語幹に接尾される。

１２-１：格語尾接尾法

母音調和による区分/ 語幹末音の種類による区分		第１式1型格語尾	第２式格語尾		
		与位格	属格	対格	方向格
語末母音	短母音（и を除く）	-д	-ы н [2]	-ы г [2]	р у у [2]
	長母音（и й を除く）		(-г и й н)**	(-г)*	
	長母音 и й		(-н)*		
	二重母音				
	短母音 и		(-и й н)	(-и й г)	
語末子音	н,隠れた н	(н)-д	(н)(-ы [2])	-ы г [2]	
	隠れた г	-д	(г)(-и й н)**	(-г)*	
	ж,ч,ш		(-и й н)**	(-и й г)**	
	г	(-т)			
	С		-ы н [2]	-ы г [2]	
	р				(л уу [2])
	上記以外の子音	-д			р у у [2]
語末記号	軟音符		(-и й н)**	(-и й г)**	

表１２-２：格語尾接尾法

母音調和による区分/語幹末音の種類による区分		第３式格語尾	第４式格語尾		第６式格語尾
		共同格	奪格	造格	主格
語末母音	短母音（и を除く）	-тай[3]	-aa c[4]	-aap[4]	ゼロ語尾
	長母音（и й を除く）		(-г aa c[4])	(-г aap[4])	
	長母音 и й				
	二重母音				
	短母音 и		(-и ac[2])	(-и ap[2])	
語末子音	н，隠れた н		(н) -aa c[4]	-aap[4]	
	隠れた г		(г)-aa c[4]	(г)-aap[4]	
	上記以外の子音		-aa c[4]	-aap[4]	
語末記号	軟音符		(-и ac[2])	(-и ap[2])	

メモ１　実詞語幹に、「隠れた н」、「隠れた г」があらわれる場合は、（н）、（г）で表記した。

メモ２　属格、対格の変型形において、（-н）＊、（-г）＊は第１式１型格語尾、（-г и й н）＊＊、（г）（-и й н）＊＊、（-и й н）＊＊、（-и й г）＊＊は第５式１型格語尾となる。

メモ３　方向格は、実詞語幹に後置される。

２．２．人称所有語尾

２．２．１．人称所有語尾の種類

人称所有語尾は、人称と単数/複数により区分される。

表１３：人称所有語尾の種類

所有語尾区分名称	人称	単数	複数
第５式２型所有語尾	１人称	м и н ь	м aa н ь
	２人称	ч и н ь	т a н ь
	３人称	н ь	

２．２．２．人称所有語尾後置法

人称所有語尾は、自立語に後置される。接尾法の主原則、副原則等の制約を受けない。

２．３．再帰所有語尾

２．３．１．再帰所有語尾の種類

再帰所有語尾は、所有、所属、動作・状態を表し、その所有者、所属者、動作・状態の主体は、その文中の主語に一致する[5)]。

表１４：再帰所有語尾の種類

所有語尾区分名称	意味	再帰所有語尾基本形	母音交替形数
第４式所有語尾	再帰所有：「自分の～」「自分が属する～」「自分が～する～」	-aa/-oo/-θθ/-ɜ ɜ	-aa^4

２．３．２．再帰所有語尾接尾法

再帰所有語尾は、「母音調和の副原則」（系列別）および「自立語語幹末音」の種類に基づき、実詞語幹に接尾される。

表１５：再帰所有語尾接尾法

母音調和による区分/語幹末音の種類による区分		第４式所有語尾
語末母音	短母音（и を除く）	-aa^4
	長母音	(-г aa^4)
	二重母音	
	и	(-и a^2)
語末子音	子音	-aa^4
語末記号	軟音符	(-и a^2)

２．４．動詞語尾

２．４．１．　動詞語尾の種類

動詞語尾は、「母音調和の原則」（性別、系列別）の観点から、第１式１型、第２式、第３式、第４式、第５式１型、第６式に区分される。また、意味・用法の観点から、分離、結合、逆接、意志、習慣、依頼、継続、願望、命令、現在、未来、過去等に区分される。

表１６：動詞語尾の種類

動詞語尾区分名称	意味・用例	動詞語尾基本形	母音交替形数
第１式１型動詞語尾	分離１：「～して」	-ж	無
	過去３：「～した」	-в	無
	結合１：「～しつつ」「～しながら」	-н	無
	逆接：「～けれども」「～が」	-в ч	無
	未来２：「～する」	-х	無
第２式動詞語尾	結合２：「～するとすぐ」	-н г у у т/-н гүү т	-н г у у т[2]
第３式動詞語尾	意志：「～しよう」	/-я/-ё/-е	-я[3]
第４式動詞語尾	未来１「～します」	-н а/-н о/-н ө/-н э	-н а[4]
	近未来：「～するところです」	-л аа/-л оо/-л өө/-л э э	-л аа[4]
	近過去：「～したところです」		
	過去２：「～した」	-са н/-со н/-сө н/-с э н	-са н[4]
	習慣：「いつも～する」	-д а г/-д о г/-д ө г/-д э г	-д а г[4]
	依頼：「～して下さい」	-аара й/-ооро й/-өөр э й/-э э р э й	-аара й[4]
	継続：「ずっと～している」	-аа/-оо/-өө/-э э	-аа[4]
	分離２：「～してから」	-аа д/-оо д/-өө д/-э э д	-аа д[4]
	願望：「～したい」	-м аар/-м оор/-м өөр/-м э э р	-м аар[4]
第５式１型動詞語尾	過去１：「～した」	-ж э э	無
第６式動詞語尾	命令：「～しなさい」	ゼロ語尾	無

２．４．２．動詞語尾接尾法

動詞語尾は、「母音調和の原則」（性別、系列別）および「自立語幹末音」の種類に基づき、動詞語幹に接尾される。

表１７-１：動詞語尾接尾法

母音調和による区分/動詞語幹末音の種類・機能による区分		第１式１型動詞語尾			第２式動詞語尾	第３式動詞語尾
		分離１	結合１	逆接	結合２	意志形
語幹末母音	短母音（и を除く）	-ж	-н	-в ч	-н г уу т [2]	-я [3]
	長母音					
	二重母音					
	и					
語幹末子音	в，г，р	(-ч)				(-ъ я [3])
	上記以外の子音	-ж				
語幹末記号	軟音符					-я [3]
機能		副動詞形	副動詞形	副動詞形	副動詞形	終止形

表１７-２：動詞語尾接尾法

母音調和による区分/動詞語幹末音の種類・機能による区分		第４式動詞語尾			
		未来１	過去２	習慣	依頼
語幹末母音	短母音（и を除く）	-н а [4]	-са н [4]	-д а г [4]	-аара й [4]
	長母音				(-г аара й [4])
	二重母音				
	и				(-и ара й [2])
語幹末子音	в，г，р				-аара й [4]
	上記以外の子音				
語幹末記号	軟音符				(-и ара й [2])
機能		終止形	形動詞形	形動詞形	命令形

表１７－３：動詞語尾接尾法

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">母音調和による区分/
動詞語幹末音の種類・機能による区分</td><td colspan="3">第４式動詞語尾</td><td>第５式１型動詞語尾</td></tr>
<tr><td>継続</td><td>分離２</td><td>願望</td><td>過去１</td></tr>
<tr><td rowspan="4">語幹末母音</td><td>短母音（и を除く）</td><td>-аа^{4}</td><td>-аа д^{4}</td><td rowspan="7">-маар^{4}</td><td rowspan="4">-ж э э</td></tr>
<tr><td>長母音</td><td rowspan="2">(-г аа^{4})</td><td rowspan="2">(-г аа д^{4})</td></tr>
<tr><td>二重母音</td></tr>
<tr><td>и</td><td>(-и а^{2})</td><td>(-и а д^{2})</td></tr>
<tr><td rowspan="2">語幹末子音</td><td>в，г，р</td><td rowspan="2">-аа^{4}</td><td rowspan="2">-аа д^{4}</td><td>(-ч э э)</td></tr>
<tr><td>上記以外の子音</td><td rowspan="2">-ж э э</td></tr>
<tr><td>語幹末記号</td><td>軟音符</td><td>(-и а^{2})</td><td>(-и а д^{2})</td></tr>
<tr><td colspan="2">機能</td><td>形動詞形</td><td>副動詞形</td><td>形動詞形</td><td>終止形</td></tr>
</table>

メモ１　動詞の機能

①終止形　述語動詞として文末に置かれる。

②形動詞形　名詞を修飾するなど形容詞的に用いられる他、述語動詞として文末に置かれる。

③副動詞形　動詞を修飾するなど副詞的に用いられる。

④命令形　命令・指示機能をもつ。

２．５．接尾辞

２．５．１．接尾辞の種類

接尾辞は、「母音調和の原則」（性別、系列別）の観点から、第１式１型、第１式２型、第２式、第４式、第５式２型に区分される。また、意味・用例の観点から、実詞を動詞化する他、動詞を実詞化させるなどの機能をもつ。

表 18：接尾辞の種類

接尾辞区分名称	意味・用法	接尾辞基本形	母音交替形数
第１式１型接尾辞	実詞を他動詞化する:「～する」	- л	無
	実詞を自動詞化する:「～なる」	- р	無
	受身:「～される」	- г д	無
第１式２型接尾辞	職業:「～する人」	ч и н	無
第2式接尾辞	使役1:「～させる」	- у у л /-үү л	- у у л [2]
	器具:「～するもの」	- у у р/-үүр	- уур[2]
	場所:「～する場所」	- у у р ь /-үүр ь	- уур ь [2]
	複数:「～等」	-у у д /-үү д	- уу д [2]
第4式接尾辞	実詞を他動詞化する:「～する」	- шаа/-шоо/-шөө/-ш э э	- шаа[4]
	使役2:「～させる」	- л г а/-л г о/-л г ө/-л г э - г а/-г о/-г ө/-г э	- л г а[4]/ -г а[4]
	多数:「一緒に～する」	- ц г аа/-ц г оо/-ц г ө ө/-ц г э э	- ц г аа[4]
	動作の結果:「～されたもの」	- л г а/-л г о/-л г ө/-л г э	- л г а[4]
第5式２型接尾辞	複数:「～達」	н ар	無

２．５．２．接尾法

接尾辞は、「母音調和の原則」（性別、系列別）および「自立語（語幹）末音」の種類に基づき、実詞語幹または動詞語幹に接尾される。

表１９－１：接尾辞接尾法

母音調和による区分/語幹末音の種類		第１式１型接尾辞		第１式２型格語尾	第４式接尾辞
		他動詞接尾辞	自動詞接尾辞	職業	他動詞接尾辞
語末母音	短母音	-л	-р	ч и н	-шаа[4]
	長母音				
	二重母音				
語末子音	р		(-л)		
	上記以外の子音		-р		
語末記号	軟音符				

表１９－２：接尾辞接尾法

母音調和による区分/語幹末音の種類による区分		第１式１型接尾辞	第２式接尾辞			
		受身	使役１	器具	場所	複数
語幹末母音	短母音（и を除く）	-г д	-у у л^{2}	-уур^{2}	-уур ь^{2}	(-н уу д^{2})
	長母音		-			
	二重母音					
	и		(-и у л)			
語幹末子音	л	(-д)	-у у л^{2}			(-н уу д^{2})
	в	(-т)				-уу д^{2}
	р			(-уу л^{2})	(-уу л ь^{2})	(-н уу д^{2})
	с		-	-уур^{2}	-уур ь^{2}	-уу д^{2}
	д	-г д				
	上記以外の子音		-у у л^{2}			
語幹末記号	軟音符		(-и у л)			(-н уу д^{2})

表１９－３：接尾辞接尾法

母音調和による区分/語幹末音の種類による区分		第４式接尾辞			第５式２型接尾辞
		多数	動作の結果	使役２	複数
語幹末母音	短母音（и を除く）	-ц г аа^{4}	-л г а^{4}	-	н а р＊
	長母音			(-л г а^{4})	
	二重母音			-	
	и				
語幹末子音	л		(-л а г а^{4})		
	в				
	р				
	с			(-г а^{4})	
	д				
	上記以外の子音			-	
語幹末記号	軟音符				

メモ１　複数接尾辞 н а р＊ は実詞語幹に後置される。

２．６．助辞

２．６．１．助辞の種類

助辞は、「母音調和の原則」（性別、系列別）の観点から、第１式１型、第２式、第４式、第５式１型、第５式２型に区分される。また、意味と用法の観点から、疑問、否定、感嘆、呼称、推量、主語表示、特定・指示等に区分される。

表２０：助辞の種類

助辞区分名称	意味・用法	助辞基本形	母音交替形
第１式1型助辞	特定・指示:「～こそ」	л	無
第２式助辞	疑問1:「～か」	у у/ҮҮ	у у [2]
第４式助辞	感嘆1:「～ね」「～よ」	д аа/д оо/д өө/д э э	д а а [4]
	呼称:「～さん」	аа/оо/өө/э э	а а [4]
第5式1型助辞	否定2:「～ない」	-г ү й	無
第5式2型助辞	感嘆2:「～ね」「～よ」	шҮҮ	
	疑問2:「～か」	в э	
	否定1:「～ではない」	б и ш	
	推量:「～だろう」	б и з	
	主語表示:「～は」「～が」	б о л	

２．６．２．助辞後置法

助辞は、「母音調和の原則」（性別、系列別）および「自立語(語幹)末音」の種類に基づき、実詞語幹および述語動詞（文成分）等に後置される。

表２１：助辞後置法

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">母音調和による区分/
自立語語末音の種類</td><td>第1式
1型
助辞</td><td>第2式
助辞</td><td colspan="2">第４式助辞</td><td>第5式
1型
助辞</td><td colspan="5">第5式２型助辞</td></tr>
<tr><td>特定</td><td>疑問1</td><td>感嘆１</td><td>呼称</td><td>否定２</td><td>感嘆２</td><td>疑問２</td><td>否定１</td><td>推量</td><td>主語</td></tr>
<tr><td rowspan="2">語末
母音</td><td>短母音</td><td rowspan="5">л</td><td>у у^{2}</td><td rowspan="5">д аа^{4}</td><td rowspan="5">а а^{4}</td><td rowspan="5">－гγй</td><td rowspan="5">шγγ</td><td rowspan="2">в э</td><td rowspan="5">б и ш</td><td rowspan="5">б и з</td><td rowspan="5">б о л</td></tr>
<tr><td>長母音・二重
母音</td><td>(ю у^{2})</td></tr>
<tr><td rowspan="3">語末
子音</td><td>в，л，м，н</td><td rowspan="3">у у^{2}</td><td>(б э)</td></tr>
<tr><td>上記以外の
子音</td><td rowspan="2">в э</td></tr>
<tr><td>語末
記号</td><td>軟音符</td></tr>
</table>

メモ１　－гγй（否定２）は実詞語幹に接尾される。

Ⅴ．おわりに

語学教育文法は、一般の記述文法の成果をふまえなければならないが、教授法という軸に沿いながら、文法項目を整理していくため、両者の目指す体系は必ずしも一致しない。学習上の混乱を避け、学習者の理解力向上を優先させるため、文法項目の説明に「アクセント」の強弱がつきやすいのが語学教育文法の特徴である。本稿でも、そうした視点で、現代モンゴル語文法のうち、特に付属語接尾法について再整理してみたが、具体的な自立語、付属語の用法について触れることができなかった。これらの諸点についても、今後機会を改めて論じていきたい。

注

1)　本稿では、キリル文字導入（1946 年）以後のモンゴル語（モンゴル国の公用語）を指す。

2)　一般に、付属語のうち、語尾および接尾辞は自立語語幹に接尾され、助辞は自立語語幹および文の成分である自立語に後置（分かち書き）される。ただ、本稿題名および章・項目名等では、両者をまとめて「付属語接尾法」または「接尾法」と記した。もちろん、本稿本文の各付属語説明箇所においては、自立語(文成分)・自立語語幹、接尾・後置を区分して記し

ている。また、自立語（文成分）・自立語語幹および自立語語末音・自立語語幹末音を、便宜上、自立語（語幹）、自立語(語幹)末音と記した。特に、本稿「Ⅲ．1．2．自立語語幹」および「Ⅳ．2．付属語接尾法」では、自立語語幹を実詞語幹および動詞語幹に区分して記述した。上記以外の事例についてはその都度別記した。

3) 語尾、接尾辞の一部は自立語語幹に接尾される他、付属語が接尾された実詞、動詞の形動詞形等と共に用いられることもあるが、本稿では、自立語語幹に接尾される付属語接尾法について論じている。

4) 正字法は、モンゴル語文字表記の規則を指す。広義では、母音調和の原則に基づく表記も正字法の一部をなすが、一般に、正字法というと子音表記の規則を指す場合が多く、たとえば、子音の前後いずれかに必ず母音を必要とする母音持ちの 7 子音（м，н，г，л，б，в，р）および子音の前後に母音を必要としない非共鳴 9 子音（д，т，з，ж，ц，ч，с，ш，х）などは、正字法において重要な規則とされている。

5) 尚、再帰所有語尾の用例（下線部）は以下の通りである。

① 所有

Та номоо тэнд тавиарай.

あなたは、（自分の）本を、そこに置きなさい。

② 所属

Дорж сая сургуульдаа явсан.

ドルジさんは、先ほど（自分が通学している）学校に行きました。

③ 動作・状態の主体

Би багаасаа ном унших дуртай байсан.

私は、（自分が）子供の時から、本を読むのが好きでした。

主要参考文献

1. John C. Street 'Khalkha Structure' Uralic and Altaic Series, Vol. 24, Indiana University Publications 1963
2. John G. Hangin 'Basic Course in Mongolian' Uralic and Altaic Series, Vol. 73, Indiana University Publications 1968
3. Nicholas Poppe 'Grammar of written Mongolian' Otto Harrassowitz・Wiesbaden 1964
4. 小沢重男『モンゴル語四週間』大学書林 1986年
5. 小沢重男『現代モンゴル語辞典』大学書林 1994年
6. 塩谷茂樹『初級モンゴル語』大学書林 2001年
7. Ц. Дамдинсүрэн 'Монгол үсгийн дүрмийн толь' Улаанбаатар 1983